

シリーズ  
「景観文化考」第5回

S E R I E S

# 景観と色彩

L A N D S C A P E



中井 和子 (なかい かずこ)

中井景観デザイン研究室 代表

東京出身。筑波大学大学院環境デザイン専攻修了。(株)G.K.インダストリアルデザイン研究所(東京)勤務を経て、1975年～78年フランス政府給費留学生として、マルセイユ及びパリの国立美術大学で建築・環境デザインを学ぶ。1985年建築・環境デザインの研究所を設立し現在に至る。北海道教育大学・札幌市立大学・北海道工業大学の非常勤講師、「まちの色彩作法」(共著)・「農業・農村と地域の生態」(共著)・「北のランドスケープ」(共著)など。

「北空昼光」または「北窓昼光」という言葉がある。色を見る場合の光の条件を表現する内容である。北半球では家の北側の窓から入る直射日光を含まない光がそれで、日中の天候や時間による変化や季節による光の変化が少ないことから、色を検討する際の光に用いる。一般に画家のアトリエでは北側に広い窓を設けて、絵を描く場合の光として導入することが多い。17世紀に科学者ニュートンにより、太陽光がプリズムで分光され虹の七色として認識されてから、色は光の電磁波の一種で、可視光線<sup>※1</sup>として理解されたのが色彩科学の始まりである。「色は、光と物体と人間との関係で知覚される現象」であるから、「光と物体と人間との関係」のなかで、どれか一つでも条件が変化すると色の見え方が異なってくる。景観における環境色彩を検討する場合、この基本的事項を確認しておくことが重要である。

屋外では「光」の変化は常に起こり得ることで、一日の中でも日の出と日の入り時刻は、太陽光線が長波長に偏り本来の色に見えないため、色彩の検討には不向きな時間帯である。また、方角により建物の色の見え方が違ってくる。さらに、地球上の位置によっても太陽の光の質が異なり、景観の色彩の見え方に若干の違いが生じてくる。例えば、北欧の国々は北緯55度以北に存在することから、夏は夜でも明るい白夜で、反対に冬の太陽は微光である。街並景観の色彩や室内のインテリアでは、その影響を反映するデザインが試みられている。北欧の冬の太陽は、昼間でも地平線をかすめるように日の出・日没することから、日中でも太陽の弱い光が家々に横の方向から差し込む。したがって、建物の窓を横長に開口することで、少しでも長く建物内に光を取り込む工夫がされている。また、逆に夏の夜は明るくなくなかなか暗闇にならないことから、光と影を上手に演出する室内のインテリアがなされる。スウェーデンやドイツでは、一般的なマンセル色票<sup>※2</sup>ではなく各々独自のカラーシステムを作成し、自国の景観にふさわしい色彩計画を試みている。

※1 可視光線

太陽から放射される電磁波のうち波長域380～780nm(ナノメートル:100万分の1mm)は、人間が色を知覚できる可視光域の電磁波として、可視光線と呼ばれる。

※2 マンセル色票

米国の画家マンセル(A・H・Munsell)が考案した色の表示法。色相・明度・彩度にしたがい、赤・黄・緑・青・紫色及びその中間色の計10色を基準にして組み立てたもの。

一方、赤道に近い国々などは、真青な空から太陽光線の強い照射を真上から受けることになるから、はっきりした原色に近い色使いでないと光に負けてしまう。このように太陽の光は、地理的条件により光の質や強さが異なる。人間が屋外で物を見る場合には光が必要であるから、地域の環境色彩の見え方が、気候風土や生活文化の形成において多大な影響を及ぼしていると考えられる。

次に「光と物体の関係」が変化する場合を考えると、木や石・レンガ等の建築物の素材の違いや表面の凸凹感などの仕上げ（テクスチャー）が異なれば、同じ色彩であっても光の反射率や反射の方向が違ってくるので、色の見え方が若干異なってくる。建築設計や環境デザインの領域では、多くの場合三次元で立体的に見る場合が多いことから、色彩とともに物体表面の光の反射のあり方への配慮が課題となり、光の明・暗と色彩と一緒に考える必要がある。

さらに「光と人間の関係」に変化が生じる場合だが、高齢化に伴う老眼や白内障などによる眼の組織の変化は、水晶体の濁りや黄変化により全体の色の見え方に変化を及ぼす。また、色覚障害の人々も色の判断がつきにくい場合がある。その結果、「人間」の変化に対しては、医学の知見と体験的実証を積み重ねて、ユニバーサルデザイン等に配慮した色彩計画が要求される。このように誰もが同じに色を知覚しているとは限らないわけで、「光と物体と人間の関係」が整ってはじめて、色彩を共有化できるのである。すなわち、光と物体の科学的関係、光から色を知覚する生理学的関係、色彩に伴う人間の心理的感情等への理解が要求さ

れるのである。

「色」は誰にでもわかるし、好き嫌いの感情もはっきり表現しやすいが、暮らしの中で色について考える場合、「色彩感情」は三層の内容で構成される。一つは人間の根源的な色彩感情で、例えば、「黒」に対しては恐怖や死を連想し、「赤」に対しては血や生命や情熱を感じるなど、特定の色彩に対して人類共通に抱く色彩感情がある。二つ目は、先にあげた地域の気候風土と民族や文化により規定される色彩感情で、社会的・文化的な色彩感情である。三つ目が、個々の人間の好き嫌いの色彩心理で、ファッション業界の流行色や個人の趣味・嗜好とも関係する色彩感情である。

都市や農村の景観はさまざまな要素で構成され、その各々が色を保有している。景観形成における色彩の取り扱いは、個々の色使いの良否を検討することより、地域の気候風土と歴史・文化の社会的背景を踏まえた、総合的景観形成における色彩相互の関係を考えることが重要である。視覚情報として景観が認識される場合、色彩は形態より優勢である。具体的に環境色彩を取り扱う場合、個人の好き嫌いの色彩感情に頼るのではなく、地域の光で見ながら客観的に色彩計画を行なう必要がある。その際に要求されるのが、対象物の存在時間、面積の大きさ、動・不動のあり方、公・私の用途、地と図の関係などに配慮した、景観形成における色彩相互の取り扱いである。

景観と色彩の関係は、簡単なようだがさまざまな領域にまたがり、色彩科学と知覚心理が融合する、まちな色彩作法の形成でもある。



※写真撮影：筆者